
雨降るバス停

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降るバス停

【Nコード】

N20400

【作者名】

刹那

【あらすじ】

雨の日にバス停で出会った少女。

その子はずっと自分の兄を待ち続けていた。

一人の少年と少女が織り成す、オリジナルストーリー。

その日は雨の日だった。

それもとてもしごい豪雨で、10秒でも雨の中にいれば全身びしょ濡れといったぐらい。

田舎の中学校に通う俺は、その下校時、雨の中を突っ切っていた。カバンを頭にかぶせ、少しでも濡れないようにと走った。

大きな雷が落ちるたび、体をビクつかせながら。

流石に体力も無くなってきた、どこか一休憩できるところはないかと、頭を巡らせた。

その時に浮かんだのが通学路に建つ屋根ありのバス停。

あそこなら一休みできる。

そう考えた俺は息が途切れ途切れの中、バス停に向かった。

バス停の中には一人の少女がベンチに腰を下ろしていた。

見た目からして中学生といったところ。

走りこんできた俺を見上げ、ニコツと微笑んだ後、顔を伏せた。

そんな少女がいる傍で俺は二人っきりで雨降るバス停で一休みした。

「なかなか止まないな」

空を見上げ、独り言を呟く。

バス停に入って小一時間。一瞬でも雨は弱まらない。

そろそろ帰らないと……。

しかし、何で俺は雨が止むまで待っているんだろう。
体力回復の一休みのはずだったのに。

そう思い出し、雨の中をもう一度走る決心をつける。

「しゃっ!」

走り出そうとした瞬間。

「あのお」

少女に呼び止められる。

危うく滑って転びそうになったが、踏みとどまり振り返る。

「なんだ？」

「これ……使います？」

少女は一つの折り畳み傘を差し出してくれた。

「いや、これだけ濡れてるんだし、もう良いよ。ありがとう」

それだけ言って、俺は雨の中に入っていた。

家につく頃には、雨は止んでいた。

あれから三日後。

またしても雨の日。

だが今日は朝からの雨だったので、傘を持ってきていた。

前の頃のようにびしょ濡れになることはない。

ゆっくり歩く。

走るのもうごめんだ。

三日前の出来事を頭に浮かべる。

そこで、ふとバス停のことを思い出す。

もしかして、いるかな？

なんて思って、バス停に向かった。

あの雨の日から一度も出会ってない少女、なぜかもう一度会って

みたかった。

なんだか、気が合いそうな気がして。

いつの間にか、たどり着いていたバス停の中を覗いてみた。中には、一人の少女が腰を下ろしていた。

あの子だ……。

俺はバス停に入り、傘を閉じる。

傘から雫を落としながら、少女の前に立つ。

「よう」

「んん？」

少女が頓狂な声をあげてこちらを見上げた。

「前会ったよな」

「え？ 初めてかと……」

少女は頭を傾ける。

「まあ、覚えてなくても無理ないわな……どこの学校？」

「とよとみちゆつがく
豊臣中学」

「俺と一緒にゃん！ 何年何組？ 名前は？」

「え、えと……二年一組、かつらぎ ちゅうる桂木千鶴」

「俺と同学年なのか……。俺、一度もお前を見たことないんだが」

「私も」

この二年間、一度も会わないというのもすごいものだ。

ってか、ホントにこんな奴がいたんだろうか。

「お前は、バス乗ってどっか行くのか？」

「ううん。ただ、待ってるだけ」

「誰の事を？」

「お兄ちゃん。広島に行ったんだ。今日、帰って来る日だから」

「ほうう」

広島にねえ……。

「じゃあな」

「うん」

俺はバス停を出て、歩いた。

雨は簡単にだが、ポツポツと落ちてきている。
傘は必要ないくらいだ。

そういえば、桂木に名前を教えてなかった。
まあ、いいか。

明日、学校で会うんだし。

俺は家に帰った。

だが、学校に桂木千鶴という女性徒は存在していなかった。

その日、俺はバス停に走った。

あの子一体なんなのか。

それが聞きたかった。

曇り空の下、道路を走りぬけ、バス停に駆け込む。

中は、無人。

誰もいない。

そりゃあ、桂木が必ずここに居るといふ保証は無い。

ただ、唯一の手がかりだから。

唯一、出会える場所だったから来てみただけ。

なのになんだ？ この不信感は。

ここに、彼女がいらないということがありえないと思ってしまっ
なぜだ？

雨が降り出したのか、バス停の上から不規則な音が聞こえる。

俺は、一度、バス停を出て空を見上げた。

ポツポツと雨が降ってきている。

ゆっくり、振り返ってみた。

すると、そこには一人の女性徒がベンチに腰を下ろしていた。

「桂木??」

「え？」

桂木は顔をこちらに上げる。

「なんで、さっきまでいなかったはずだ。なのにどうして？」
「へ？」

素っ頓狂な声を上げる。

そんな桂木に近づき、俺はそつと桂木に手を伸ばした。

だが、桂木には触れることができずにそのまま素通りする。
体を通り向けた？？

意味がわからない。

「お前……一体」

「なんなの？ 君は誰？」

桂木は俺に言ってきた。

君は誰？ ……だと？

たしかに名前は教えなかった。

だが、ここまで他人に聞くような感じでいうものか？？
違う。

そうか。

彼女がもし存在していないのなら。

幽霊だとしたら。

今日を、兄貴が帰ってくる日であると思い込み、そして延々とその日をループしているのだとしたら。

記憶が毎回、リセットしているのだとしたら。

なら、全てのつじつまが合う。

体に触れられなかったこと。

学校に存在していなかったこと。

いきなり、姿を現したこと。

そして、毎回俺のことを覚えていないこと。

そう、全てのつじつまが合う。

「なんなの？」

「あ、あの……」

彼女のことはほっとけない。

成仏っていうのかは分からないが、とりあえず、安らかに逝って欲しい。

なぜか、そう思う。

なにか、良い方法は……。

あ、そうだ。

「お前って、兄貴を待つてるんだろう？　どんな奴なの」

「なんで、そのことを」

「良いから、言ってくれ」

「……優しくて、かつこよくて、私を大事にしてくれるお兄ちゃん。いつもかつこつけてジープン履いて、そうだなあ、顔は君に似てる。カツコさえ真似ればそっくりさんかも」

よし、使える。

「んじゃ、ありがとさん」

「え？」

俺は雨の中、道路を走った。

彼女を、逝かすために。

ただいま、俺はチャリで隣町まで行き、ジープンを買って、それに合う服を着て、自分の家の近くにあるバス停にバスで向かってい

る。

窓からは雨が降っている外が見える。

俺は、彼女が待ち続ける兄貴として、今、彼女のいるバス停に行っている。

きつと、今も彼女は待ち続けているはずだ。
だから……。

プシューー

バスの扉が開く。

俺はゆっくりバスを降りる。

案の定、彼女は座っていた。

桂木は目を見開き、俺のことを見てくる。

「お……兄ちゃん？」

「ああ……。ただいま」

「おかえりりりー!!」

思いつきり飛びついてきた。

なぜか、桂木の姿には実体があった。

「ずっと、ずっとまっていたんだからあ」

「ごめんな」

「お兄ちゃん……」

桂木の姿が薄れていく。

「もう、どこにも行かないでね」

「ああ」

完璧に姿が無くなる。

そこは、誰もいないバス停になっていた。

と、

俺の記憶にはこの事は残っていない。

分からないが、ここ数日前のことが完璧に切り離されて、全く、思い出せない。

一体、何があったのかも。

チャリがどこにいったのかも。

なんともおかしな話だ。

いつも、学校帰りに通るバス停を見るたびに、なにかが心に引っかかる。

なにかがあつたのかな。

この数日前に。

だめだ。

ノイズがかかっていて、思い出せない。

だから、一体何なのかを突き止めるため、俺はバス停のベンチに座ってみた。

なんか、懐かしい気がする。

すると、ちょうど良く、バスが止まる。

バスから少女と青年が一人ずつ降りてくる。

その二人はとてもたのしそうに話し合っている。

少女の顔に見覚えがある気がするのは、気のせいだろうか。

俺は、二人の少女と青年の楽しそうな光景を目にして、いつの間にか頬を緩めていた。

(後書き)

ちょっと、適當すぎたかもです。

すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2040o/>

雨降るバス停

2010年10月9日00時55分発行